

第698回番組審議会報告

2025年5月7日開催

■出席委員

佐藤卓己委員長、栗栖義臣副委員長、小川明子委員（書面）、小島幸保委員、曾我部真裕委員、津村記久子委員、長谷川豊委員

■毎日放送出席者

虫明社長、宮田副社長、高山常務、酒井常務、礪澤取締役、北野取締役、中野取締役、田淵総合編成局長、羽根報道情報局長、東田制作局長、奥田コンプライアンス局長、橋本プロデューサー、伊佐治ディレクター、東郷広報部長、中西番組審議会事務局長

◆議題

報告事項

1. 「ゼニガメ」BPO放送倫理検証委員会決定についてコンプライアンス局長、制作局長が報告した。
2. 放送番組の種別の公表制度に基づき、2024年度下期6か月分の番組種別ごとの放送時間を総合編成局長が報告した。あわせて同期間のCM総量についても報告した。

◆議事の概要

2. 「放送番組の種別」の報告について

2024年度の下期は総放送時間が6万301分。報道番組1万2,110分（総放送時間の20.1%）、教育8,391分（同13.9%）、教養1万5,968分（同26.5%）、娯楽1万9843分（同32.9%）、通販3,452分（同5.7%）、その他537分（同0.9%）。前年同期と比べて教育、教養が増加し報道、娯楽が減少している。また、この半期のCM放送実績は1万690分で、総放送時間に対する割合は17.7%。

◆審議事項

テレビ番組

「新聞力 ～“紙”だからこそ～」

（2025年3月16日（日）05:00～06:00放送）

【番組概要】

日本の新聞制度を下支えてしてきた宅配制度。世界に誇る新聞普及率は識字率の高さにもつながっているとされ、もはやインフラに近い存在だった。しかし、発行部数がこの20年で半減した上に、過疎化、配達員不足、デジタル・シフトで縮小の一途をたどっている。和歌山の小さな販売店の半年を追い、国際ニュース、永田町の政局から事件まで、世間と小さな村を活字でつないできた「新聞宅配」の危機を通じて、日本の過疎化問題を照射する。

【各委員の主な意見は次の通り】

- *都市部から離れた過疎地にまで新聞が届く意義を、東京の本社から販売店、配達員、そして読者へと辿って映像で描き出している点は感慨深い。
- *新聞紙を取り巻く現状をうまくまとめていた。龍神村に車で30分かけて新聞を配っている人と、待っている人がいることに頭が下がる思いがした。
- *紙の意義があるのかないのか意識させられる番組で、非常に勉強になった。
- *新聞の未来を期待して見たが、新聞配達の過酷さを知り、自宅への配達もいずれなくなるのではと感じた。
- *地方の人たちが情報がどんどん断絶していくのは問題。正しい情報を届ける新聞やテレビ報道はすごく大事だと思う。
- *この番組は「新聞力」というより「新聞紙力」を扱っている。タイトルと番組の内容にギャップを感じた。
- *新聞の明るい未来が高校生の新聞部では何か心もとない感じがした。
- *もし戸別の配達から郵送に変わると読む側の心理にどう影響するのかが具体的に示されていて印象に残った。
- *紙のよさがあることには同意するがあまり執着し過ぎてしまうと、逆に未来を葬り去るのではないか。
- *関西大学のゼミでは紙の新聞の意義について若い世代には刺さっていないということが残酷な形であらわれた。水越教授の意見をもっと踏み込んで聞けたら、より番組に深みが加わったのではないか。
- *番組で取材した場所がどこなのか分かりにくかったので繰り返し強調して示してほしかった。
- *デジタルとアナログを対立させすぎているように思う。スマホやiPadで新聞を読むという状況もあり、メディアの輻輳性や多層性にもう少し踏み込んで、新しいメディアの形を示唆してほしかった。

【番組制作者側の説明、質問への回答】

- *願いを込めてタイトルに「力」という言葉を使ったが、少し看板倒れになっ

ていたのだとすれば、反省しなければならないと思う。

* 困難に直面しながらも頑張っている新聞記者にしっかりと向き合う番組も作るべきではないかと感じた。

* 難しいニュースや辛いニュースは見たくないという状況がある中でテレビとしても紙の新聞が持つ信頼感は今後も失わずに何とか踏ん張っていただきたいという気持ちがある。

以上